

中井正一と『土曜日』のジャーナリズム（続）： 再考のための覚書き

中 村 保 彦

1. 『土曜日』をめぐる課題

1. 1 前稿からの課題

『土曜日』がジャーナリズムの資料として、ミニコミ的な先駆性を備えている点は、前稿（中村 2009）に論じた。その際、丸山尚が提示するミニコミの特徴として次の3点を提示した（丸山 1988）。

- 1) ミニコミは、自発的に行う多様なコミュニケーションの総称
- 2) ミニコミは、人間がメディアの原点（何らかのつながりや思いの共有）
- 3) ミニコミは、少数者の意思表示（少数者の立場から多数者への働きかけ）

この、1) 自発性、2) つながり、3) 少数者、という3点は、本来、ジャーナリズムの原点ともいえる特徴だと述べた。そして、中井正一らが編集・発行した戦前の『土曜日』は、これらの特徴を備えたミニコミ的な定期刊行物だと論じた。すなわち、定期的に伝える（配布）メディアがミニコミ紙・誌、一時的に伝えるメディアがビラ・チラシとするなら、『土曜日』は少数者から多数者への働きかけとして継続的な意思表示を実践したミニコミ紙といえる。また、前稿はミニコミ紙的な観点から住谷天来の『聖花』と比べて論じた。

なお、1970～80年代の大衆文化論が流行した時代において、『土曜日』がタウン誌の先駆けだとする評価もある。けれども、タウン誌は「地域の情報誌」という意味合いが強く、『土曜日』をタウン誌と見る視点は、ミニコミがもつ個性、自立性、反権力性といった特徴を捨象してしまう。それゆえ、本稿は、ミニコミの視点を重視し、前に課題とした『土曜日』の内容を再考するための作業提示とする。

1. 2 『土曜日』の継続性

前稿が『土曜日』をジャーナリズムの資料として論じた際、三一書房（復刻）版を根拠となる資料に採用した（土曜日社 1974）。したがって、論題が現すように巻頭言の多くを執筆したとされる中井正一と『土曜日』の關係に焦点を当てている。しかし、前稿執筆の後、井上史による『土曜日』継続後紙（復刊）と能勢克男に関する詳細な論考が発表された（井上 2012）。論考によると、中井正一とともに『土曜日』の編集者だった能勢克男の旧宅（京都市左京区下鴨中川原町）から戦前期の第1から第2・3次『土曜日』が発見され、同志社大学人文科学研究所に寄贈されたとのこと。その結果、第1次『土曜日』原本のうち欠号だった26号・33号が補われ、戦後に発行された継続後誌も揃い、戦前戦後を通じた『土曜日』の軌跡が迎えられるようになった（第1～第3次という呼称は井上による）。

また、三一書房（復刻）版『土曜日』の欠号および継続後誌の発見は、第1次『土曜日』の評価や位置づけに影響する。特に、1947年に再刊された第2次『土曜日』の奥付・表紙に「47」という通号表示があることから、井上は「能勢（克男）の『土曜日』復刊への強い意思が込められている」とする。そして、この第2次『土曜日』は、唯一47号しか残っていないようだが、第1次『土曜日』が44号（1937年11月5日）で廃刊に追い込まれた際、これを最終号とするのは「特高史観」だという。能勢が拘引された1938年6月という時期と能勢が映画評などを執筆していた『現代新聞批判』の記事の掲載時期から、次号発行の準備を続けていたと推測している（井上 2012 160-161）。前稿が言及したように、ジャーナリズムの原点が、市民あるいは民衆による日常の記録活動、しかも、それは、生の営為に寄り添って痛痒感覚をもち、未来を期待の次元において捉える活動だとするなら、第1～第3次『土曜日』のジャーナリズム性と継続性（あるいは持続性）に注目したい。

2. 『土曜日』の資料論

2. 1 図書館資料論の視点

図書館が資料収集・保存する側面から、前稿は新聞や雑誌といった逐次刊行物 (serials) として扱われる資料群の難点をについて少し触れた。たとえば、新聞や雑誌などの継続して発行し続ける資料は、それが発生する時点に「新聞を広げて」読まれる。その後、読者によほど収集しようという意図がない限り大抵は捨てられてしまう。久野収が『土曜日』の散逸と消滅を嘆いたのは、新聞という資料特性によるといえるだろう。今、ジャーナリズム論の本筋から若干外れるけれども、図書館資料論および目録などの資料組織化論の視点から『土曜日』が属する逐次刊行物の特性を図書との対比によって述べてみた

い。ただし、範囲は紙の印刷媒体に限定し、電子媒体の資料は対象外とする。

一般に、図書館資料論の資料種別は、資料を図書 (book) / 非図書 (non book materials) に区別する。そして、非図書に含まれる逐次刊行物や行政資料、視聴覚資料などを区別する。その根底にあるのは、図書中心主義の資料論だ。図書館がその名前の通り「図書」の館として存在してきた歴史を見るなら当然のことかもしれない。図書館の起源は時間に抗して著作物を保存するための社会制度にあるからだ。また、図書は物理的存在として資料のパッケージ性 (独立性、モノとしてのまとまり) が強い。それゆえ、図書館が行う目録作業など資料組織化の際、モノの代替物として書誌情報を作成しコントロールしやすい。すなわち、図書館側の視点からは、図書はモノとしてのまとまりが強いので制御情報 (書誌) の対象として扱いやすい。一方、新聞・雑誌などの逐次刊行物は、田中久徳によると次のような問題点をもっている (田中 1993)。

- 1) 保存と利用の対立
- 2) 資料管理と書誌の乖離
- 3) 資料アクセス手段の不在

逐次刊行物の定義は、前稿にあげた要点を繰り返すと、①ひとつ (同一) のタイトルのもとに、②終期を予定せず、③巻号・年月次を逐って発行される資料のことをいう。これらの資料は、1回の発行をもって表現が完結する単行書 (monograph) = 図書と違い、定義の通り終期を予定せず巻号・年月次を逐って刊行されるため、休刊・廃刊しない限り表現は継続していく。したがって、利用 (読む) が優先され、終期を予定しないから資料全体の保存を計画し難い (1)。継続性ゆえにモノとしてのまとまりが弱く、資料自体の管理とそれを表現する書誌情報のコントロールが困難 (2)。また、田中の主張から20年を経た現在、資料アクセスの手段は OPAC (オンライン目録) などかなり整備されてきた (3)。そして、フロー情報のメディアとしての雑誌 (新聞も同) が蓄積保存されてストック性の価値をもつにもかかわらず、従来の図書館 (資料論) は、時間概念を含んだ情報ストックの社会システムとしての自覚をもたなかったと結論づける。この点に関しては、前述した能勢旧蔵の『土曜日』が同志社大学人文科学研究所へ寄贈された経緯 - 能勢記念館の閉鎖・売却の直前、京都生協管財課によって「せいきょう会館」へ運び移された能勢旧蔵資料の中に第2・第3次『土曜日』があったこと (井上 2012 151-154) - から現状がうかがえる。すなわち、資料収集・保存の問題は、図書館側の自覚や努力も不可欠だが、「情報ストックの社会システム」に関して、図書館を含む社会全体の意識が進展していないと困難だろう。

2. 2 逐次刊行物としての『土曜日』

前章1. 2に言及した第1～第3次『土曜日』の整理（井上 2012 150-152）を参考にして、各次『土曜日』の書誌的な情報を見ておきたい。なお、各次『土曜日』の書誌情報は、国立情報学研究所（NII）が提供する総合目録データベース（NACSIS-CAT：全国の大学図書館等が参加・利用）の登録内容（雑誌）も参考にした。

【第1次『土曜日』】

タイトル：土曜日：憩ひと想ひの午后

発行：京都，土曜日社

発売：京都，宮崎書店，1936. 7-1937. 11

判型：タブロイド判（6ページ）

創刊・終刊：12号（1936. 7. 4）-44号（1937. 11. 5）

継続前誌：京都スタヂオ通信

継続後誌：土よう日．[第二次] = Doyo bi

刊行頻度：月2回刊（1，3土曜日）

【第2次『土曜日』】

タイトル：土よう日 [第二次] = Doyo bi

発行：京都，郷土書房

判型：B 5判（24ページ）

継続前誌：土曜日：憩ひと想ひの午后

継続後誌：土曜日 [第三次]

刊行頻度：月2回刊

【第3次『土曜日』】

タイトル：土曜日 [第三次]

発行：京都，土曜日の会，1959. 8-

創刊・終刊：No. 1（1959. 9）-

判型：A 5判（32～38ページ）

継続前誌：土よう日．[第二次] = Doyo bi

刊行頻度：月刊（-No.13）

* No.14（1960. 12）-No.23（1963. 5）は不定期刊

土よう日 [第2次] から土曜日 [第3次] に関する記事内容と発行情報、執筆者に関

しては、原本を元にした井上の論稿に詳しい。特に、土曜日〔第3次〕には、新村猛、住谷悦治、辻部政太郎、ねず・まさし他の第1次『土曜日』の関係者、立野正一らプロレタリア文化運動関係者、横関武ら消費組合・生協運動関係者が執筆したという（井上2012）。

3. 第1次『土曜日』の紙面

3. 1 編集発行の状況

『土曜日』（特に注記しない限り、本稿は第1次『土曜日』とする）に関しては、当事者や関係者の証言および様々な論者によってすでに論じ尽くされている感がある。冗長な繰り返しは避けるべきだと思うが、編集発行に関連する要点だけ見ておきたい。

1980年代に行われたシンポジウム「『土曜日』と今をつなぐもの」（1984年7月21日、於京都会館）において関係者の発言がある。その内容は『思想の科学』に掲載（1984.11）の「民衆のことばをもとめて」としてまとめられている。収録されている報告の和田洋一「庶民・斎藤雷太郎」（和田1984）と斎藤雷太郎「善意を組織するために」（斎藤1984）から発行当時の様子が伺える。当時、ドイツ文学の季刊誌『カスタニエン』（とちの木）の編集発行・執筆に尽力していた和田は、『土曜日』の印象を「みすぼらしい新聞」だったと表現する。本屋の店先にて手にとってみても魅力を感じることもなく、2、3号でつぶれるだろうと思っていたという。『世界文化』の同人として参加し、中井正一と縁も浅からぬ和田の「みすぼらしい」という表現は、あまりに冷たい感じもするが、正直な感想なのだろう。しかし、能勢克男を通じて斎藤雷太郎に関するエピソードを聞くにつれ、斎藤と『土曜日』に対する評価は変わっていく。『土曜日』の編集・発行・販売に関する特殊性、庶民の智恵と行動に対して敬意もち（編集については、中井の編集者としての寄与が大きかったと考えるが今は詳しく論じない）、「十五年戦争中に反ファシズムの抵抗運動をやってカネもうけに成功したのは、斎藤の『土曜日』だけ」だと奇妙な感心をし、やがて「斎藤から学ぼう」というようになる。

一方、松竹下賀茂撮影所の俳優だった斎藤は『セルパン』（第一書房発行、定価10銭）という文化雑誌の大衆化したものを創りたいと夢みていた。また、能勢克男と中井正一はフランス人民戦線の機関誌『ヴァンドルディ』に類した日本語版の発行を考えていた。当時、時事問題が書ける有保証の『京都スタジオ通信』の存在が前提となり、両者の考えが一致する。『京都スタジオ通信』が『土曜日』化する経緯に関しては、前稿に少し触れた。斎藤が目標にした読者は「小学卒から中学卒位までの一般庶民」であり、そのためには、良い内容を平易に書いて、親しみやすいものにする。しかも、学生やサラリーマンも興味をもてるよう心がけたという。そして、1936年7月4日付『土曜日』創刊号

が発行された。斎藤は「誰に見られてもはずかしくない形と内容をそなえたもの」だったと自負して語っている（斎藤 1974）。同じ『土曜日』創刊号について、和田の「みすばらしい」という印象と斎藤の「誰に見られてもはずかしくない」自負との落差は、「民衆のことばをもとめる」際に重要な相違点だと感じる。『土曜日』の評価に関しては、井上が論じているように、斎藤雷太郎が再評価されてよいと考える（井上 2012 166-167）。ただ、この時期の事情に関しては、平林一が詳細に論じているため繰り返すは避ける（平林 1966）。

3. 2 紙面構成の特徴

前節に続いて、筆者なりに各号を逐って通覧し、表紙（巻頭言）から娯楽・編集後記に至る紙面の特徴を簡単に触れておきたい。

まず、斎藤によると（斎藤 1984）、表紙～娯楽（くらぶ）に至るタブロイド判6ページの紙面構成と主な担当者は概ね次のようだ。なお、各欄の下段括弧内は、三一書房（復刻）版から拾える連載のコラム名などを記した。全ての記事を網羅していない。

【表紙】 題字：小栗美二、絵（中央）：伊谷賢蔵、巻頭言：中井正一、能勢克男

【文化】 新村猛、文芸時評：辻部政太郎

「無理をするな」「文芸時評」「海外ニュース」

【映画】 清水光、音楽：長広敏雄

「映画評」「映画週報」「ロケ・バス」「セット裏」「海外映画情報」

【婦人】？（斎藤の報告には担当者名なし）

「明日の花束」「ヴォーグ」「音楽読本」「投稿をまつ」

【社会】 能勢克男、斎藤雷太郎

「職場の作文」（斎藤雷太郎）「われわれの日常の権利について」「社会時評」

【娯楽】？*13号「趣味娯楽」、14-16号「娯楽」、17号-「くらぶ」

「どうしろというのか?」「ラヂオ時評」「世相漫才（時事漫才）」「天声民語」

「レコード音楽の話」「新編濫用語辞典」「編輯後記」

創刊号には、『京都スタジオ通信』改題の通巻12号ということもあってか、各欄のテーマを表す「文化」「映画」といったタイトルはない。しかし、記事内容から推測するに、上記のテーマ順だと思う。また、改題2号めの13号（1936年7月17日）の表紙には、7月「2輯」とあり、各月の第3土曜発行の号には「2輯」の表示がある。

まとめに代えて

中井正一と彼の思想に関心をもつ者にとって、「全貌」といえないにしても、第1～第3次『土曜日』が揃ってきたことは喜ばしい。司書として、筆者の勝手な願いをいうなら、前に期待を述べた『中井正一全集』と同様、『土曜日』増補版の刊行を期待したい。人名・記事索引が備わっているとよい。図書館界にいてそう述べると、書誌や索引は勉強している者が自ら地道に作るものだ、と先輩諸氏からお叱りを受けるかもしれない。日常、専門書等に触れる仕事をしていると国内発行の図書に索引の付されたものが少ないゆえの感想だ。無責任な発言ご寛恕願いたい。

本稿は、前稿からの続編として中井正一との係わりにおいて『土曜日』（第1次）を再考するための前提を述べた。しかし、久野収の『土曜日』観から脱していないように思う。戦時下の『土曜日』という小ジャーナリズムに関しては、同時代の他紙（誌）と比べながら記事内容の詳細を見るべきだろう。今後の課題として他日を期したい。

【参考文献・註】

引用に関して、現行の常用漢字体を使用し、原文の傍点・ゴシック体などの強調は省略した。また、文中、「人名（姓）発行年 ページ数」としても表現した。

- 馬場俊明. 中井正一伝説：二十一の肖像による誘惑. 東京, ポット出版, 2009, 453p.
土曜日社 [編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, 184p.
平林一. 『世界文化』と『土曜日』: 『世界文化』研究 (2). キリスト教社会問題研究. 1966, 10, p.14-38.
井上史. 『土曜日』と能勢克男. 社会科学. 2012, 94, p.149-172.
久野収. “文化新聞『土曜日』の復刻によせて”. 土曜日社 [編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, p.1-7.
久野収, 鶴見俊輔. 思想の折り返し点で. 東京, 朝日新聞社, 1998, 215p.
* 「リベラリズムの系譜と不在」(p.9-42) に、『土曜日』のことを言及している。
丸山尚. ミニコミ戦後史：ジャーナリズムの原点をもとめて. 東京, 三一書房, 1985, 319p.
丸山尚. “ミニコミ”. コミュニケーション事典. 東京, 平凡社, 1988, p.512-514.
門奈直樹. 民衆ジャーナリズムの歴史：自由民権から占領下沖縄まで. 東京, 三一書房, 1983, 273p.
中村保彦. 中井正一と『土曜日』のジャーナリズム. 同志社図書館情報学. 2009, 20, p.94-106.
斎藤雷太郎. “善意を組織するために”. 思想の科学. 1984, 第7次 (54), p.74-77.
斎藤雷太郎. “『土曜日』について”. 土曜日社 [編]. 土曜日. 復刻版, 東京, 三一書房, 1974, p.1-7.
田中久徳. 雑誌資料の課題と展望：図書中心主義との決別. 現代の図書館. 1993, 31(4), p.215-218.
鶴見俊輔編集. ジャーナリズムの思想. 東京, 筑摩書房, 1965, 388p.
和田洋一. “庶民・斎藤雷太郎”. 思想の科学. 1984, 第7次 (54), p.70-74.

(なかむら やすひこ. 2012年9月29日受理)